

国際殺人団の崩壊

海野十三

青空文庫

作者は、此の一篇を公にするのに、幾分の躊躇を感じないわけには行かないのだ。それというのも、実は此の一篇の本筋は作者が空想の上から捏ねあげたものではなく、作者の親しい亡友Mが、其の死後に語ってきかせて呉れたものなのである。亡友Mについては、いずれ此の物語を読んでゆかれるうちに諸君は、それがどのような人物で、どのような死に方をしたのであるか、おいおいとお判りになつてくれることであらう。それにして「死後に語ってきかせたもの」などと言うのは大変可笑しいことに聞えるかも知れないが、これも事情を申して置かねばならないことであるが、諸君もかねてお聞きおよびかと思ふ例の心霊研究会で、有名なるN女史という霊媒を通じて、作者がその亡友から聞いた告白なのである。その告白は、実に容易ならざる国際的怪事件を語っているので、命中率九十パーセントと称せられる霊媒N女史の取扱つたものだから充分事実に近いものだとすると、この怪事件は公表するには余りに重大な事柄で、或いは公表を見合わせた方が当り障りがなくてよいかも知れないくらいなのである。しかし一方に於て、N女史の招霊術は、単なる読心術にすぎないという識者もあるようだから、それなれば、N女史の前に坐つた作者の心中にかくされていた妄想が反映したのに過ぎない

とも云えないこともないのである。兎も角、そこところは諸君の御判断におまかせするとして、怪事件の物語をはじめようと思うが、一種の実話であるだけに、筋ばかりで、描写が充分でないのは我慢していただきたい。

1

古ぼけた大きな折鞆おりかばんを小脇にかかえて、やや俯うつむき加減に、物静かな足どりをはこんでゆく紳士がある。茶色のソフト帽子の下に強度の近眼鏡きんがんきょうがあつて、その部厚なレンズの奥にキラリと光る小さな眼の行方ゆくえは、ペイブメントの上に落ちていようではあるが、そのペイブメントの上を見ているのではないことは、その上に落ちていたバナナの皮を無雑作ぞうさに踏みつけたのをみても知れる。バナナの皮を踏んだものは、大抵たいていツルリと滑べることになつてはいるが、この紳士もその例に洩もれずツルリと滑つたのであるが、尻餅しりもちをつく醜態しゆうたいも演ぜずに、まるでスケートをするかのように、鮮あざやかに太った身体を前方

に滑^{すべ}らせて、バナナの皮に一と目も呉^くれないばかりか、バナナの皮を踏んだことにも気がつかないようにみえた。そこで紳士は、急に進路を左に曲げて、ある大きな石の門をくぐって入った。守衛が敬礼をすると、紳士は、別にその方を振りむいてもみないのに、鮮^{あざや}かに礼を返したが、その視線は、更に路面の上から離れなかった。軽く帽子をとったところをみると、前^{ぜん}頂^{ちよう}の髪が可^かなり、薄くなっている。年の頃は五十四五歳にみえた。

この紳士は、構内を物静かに歩いて行^いった。それは五階建ての白い鉄筋コンクリートの真四角なビルディングが、同じ距離を距^{へだ}てて、墓場のように厳^{げん}肅^{しゆく}に、そして冷たく立ち並んでいる構内であつた。紳士は、そのようなビルディングの蔭を七つ八つも通りすぎたから、これはまた何と時代錯^{さく}誤^ごな感じのする煉^{れん}瓦^が建^たてのビルディングの扉^{ドア}を押して入^いって行^いった。そこで紳士は直ぐ左手の壁にかかつている沢山の名札^{なふだ}の中で一番上の列の一番端にかかつていた「研究所長 鬼^{おに}村^{むら}正^{まさ}彦^{ひこ}」と書いた赤い文字のある札を手にとって、その裏をかえすと、又^{また}復^{もと}の位置にパチリと収^{おさ}めた。赤かつた文字が、今度は黒い文字に代り、矢張り「研究所長 鬼村正彦」と名が読めた。さてその老紳士 鬼村所長は、この動作中にも別に視線を動かすようなこともなく、札をかえしてしまふと、階段の下の薄暗い隅にある扉を開いて、それから長い廊下を、音のしないように歩き、一番奥まった部屋の中に姿を

消した。すべての行動が、いかにも馴れ切った世界に、大したエネルギーを費すことなしに、いとも正確にすすめられてゆくという風に見えた。

作者は、たいへん詰らない鬼村博士のスナップを、意味もなくだからだと諸君の前に拵げたようであるが、これこそは最も意味のある大切なスナップなのであることは、頁を追ってゆくに従ってお判りになるうと思う。とにかく、このスナップに現われたる鬼村博士の調子は、実に博士の性格の全部をものがたるものと云ってよい。博士はこの極東科学株式会社化学研究所長として令名があるばかりではなく、「日本のニュートン」と世界各国から讃辞を呈せられるほどの大科学者で、日本科学協会々長の榮譽を担っているばかりか、英国のローヤル・ソサイエティーの名誉会長であり、米国のスミゾニアン・インスティテュートの名誉顧問であり、独国のテクニッシェ・ライヒサンスタルトの名誉研究員であり、1940年に東京で開かれる万国工業会議には副総裁に任ぜられることに決定している。「日本の工業立国は鬼村博士によつて完成されるであろう」といわれている。

鬼村博士のする事には無駄がない。その優秀な頭脳は各学会に、さまざまのすばらしい研究問題をあたえて、日本否世界の科学界を面目一新させようとしている。博士自身も、この研究所に自ら一分科を担任して、終日試験管やレトルトの側をはなれない。その

研究題目は「化学による生物の人造法」というのである。外の学者が五十年かかるところを、博士は十年で成績をあげている。

「開け、ごまの実」と廊下を飛ぶようにやって来て、博士の扉ドアの前に立った白い実験衣の小柄の青年学者が大きな声で叫んだ。

「どなたですか？」と内側から博士の扉の番をするロボットがやさしい婦人の声を出して訊きいた。

「松まつヶ谷や研究員です」

すると扉が開いた。若い松ヶ谷学士は、全身に興奮を乗せて躍おどりこむように所長室にすべりこんだ。

「先生、今朝の新聞をごらんになりましたか」

「これから見るところじゃ」と鬼村所長は答えた。博士は先刻さつきのペDESTリアンと同じ姿勢をして静かに室内を歩き廻っているのであった。帽子も外がい套とうもとらずに、

「何か異かつたことでもありましたかい？」

「昨夜、丸の内会館で、薬物学会の幹部連中が、やられちまいました。松瀬博士以下土浦、園田、木下、小玉こたま博士、それに若い学士達が四五人、みな今こん暁ぎょう息をひきとつたそうで

す」

「うん、松瀬君もやられたか」と博士はちよつと押黙おしだまって何事かを考えているようであったが、相変らず室内散歩の歩調をゆるめはしなかった。「気の毒なことじゃのう」博士の声は水のように淡々たんたんとして落付いていた。

「先生、昨夜の連中は毒瓦斯ガスにやられたそうです。症状からみると一酸化炭素の中毒らしいですが、どうも可哀かわいそう想なことをしました」と松ヶ谷学士は下を俯むいた。

「薬学者連中が毒瓦斯にやられるなんて、ちよつと妙な話じゃね」博士は、毒舌どくぜつを弄ろうするといふのでもなく、これだけのことをスラスラと言つてのけた。

「ですが先生、これで四度目でございますよ。半年とたたない間に、第一に電気学会の幹事に爆弾を抛ほうりこまれて幹部一同が惨死ざんしをする。次はS大学の工科教授室の連中が、悪性腸チブスくせいちようでみな死ぬし、第三番目には先月、鉄道省の技術官連が大島旅行をしたときに、汽船爆沈たいはんで大半溺死でいきししましたし、これで四度目です。私はいよいよこれは唯事ただごとではないと思うのですが……」

「唯事ではない——とは」博士が例の調子で呻うめくように言った。

「偶然の出来ごとでは無いといふのかね」

「確かに、これは何か陰謀が行われているのに違いないと思うのです。一つ先生のお名前
で学界に警告をなさってはどうかですか。でない、この調子で行けば、遠からず、我国の
科学者は全滅するかも知れません」

「全滅、ウフ、それも悪くはないだろうが、一応警告を出すことにしようか。それにしても
これが陰謀だとすると、どんな方面からのものだと考えているかね、君は」

「私は、こう思っています」と松ヶ谷学士は瞳を輝かして言った。「どうやら、これは変
態的な性格を持った化学者の悪戯いたずらだろうと思うのですが。それは鉄道省の場合の外ほかは、
爆弾、バクテリア、それから毒瓦斯という風に、いずれも化学者に縁えんのあるものばかりが、
殺人手段に使われていることです。それから犯人は学界の事情によく通じているとみえて、
幹部の出席する会合ばかりを覗ねらっています。先生も、どうか会合へは今後一切御出席なさ
らぬ様にねがいます」

「君は、犯人の心当りでもあるのかね」

「無いわけでもありませんが、申しあげません」

「僕には言えないというのかね」

「言うのを控えた方がよいでしょう。それにまだ明瞭めいりょうな証拠を握ったわけでもありま

せんから……」

「君は棕島技師のことを指して言っているのじゃないだろうな」博士は、はじめて立ち止ると、帽子や外套を脱ぎながら言葉をつぎ足した。

「……」松ヶ谷学士は、棕島技師の白皙長身で、いつも美しいセンターから分けた頭髪を目の前に浮べた。

「棕島君なら、僕が保証をするよ。あれはすこし妙な男ではあるが、そんな勇敢な仕事の出来るほどの人物じゃない。うちの娘の真弓のお守をしている位が精一杯じゃて」

松ヶ谷学士は、複雑な感情をジツと堪えていた。

2

ちようど其の時間に、棕島技師は陸軍大臣の官邸で、つるぎやま 剣山陸軍大臣と向い合つて、ていせい 低声で密談中であつた。棕島技師は、緊張にこまかくふるえながら、普段から真白い顔

色を、一層蒼白くさせて、大臣の一言一句に聞き入っていた。

「事態は、想像以上に容易なんのです」と大臣は、寝不足らしい血走った眼を大きく見開いて云った。「彼等国際殺人団の一味徒党というのは、どの位、我国の政治界、経済界、科学界に潜行しているのか、さっぱりわからないのですが、その組織たるや、実に巧妙な方法で、一人の団員は、自分に指令を持つて来る一人の人間と、自分が指令を伝達すべき二人の人間と、この三人しか知らないというのです。兎に角、最近四回に亘る科学者虐殺事件は、あきらかに、この国際殺人団が活躍をはじめたものと考えてすこしも疑う余地がありません。これから先に、この災害が、どの位拡ってゆくのか考えただけでも恐ろしいことです。彼等は、巧妙なる組織と、豊富なる情報と、莫大なる資金と、しかもあくまで優秀なる頭脳と知識とを擁して立っているのですから、これは容易なことではうち破れません。宣戦布告のない戦争です。敵の戦線は、現に帝都の中に歴然と横たわっているのです。

しかも敵影は巧みにカムフラージュされて、我々はその覗いどころが見付からないのです。で先刻申しあげたように、あなたの御尽力を乞いたいわけです。国家のために、敢えてあなたの御生命の提供を御願いしたい」

「だが、閣下のおつしやることは、余りに空想すぎるのじやありませんか」と椋島技師は幾分苦笑を禁じ得ないという面持おももちで云った。「いくら日本人が墮落だらくをしていたって、要路ようろの高官とか、其その道の権威とか言われる連中が、そうむぎむぎ敵国の云うことをきくわけはないじやありませんか」

「そういうことを今あなたと議論しようとは思いません。それは、わが陸軍の探知し得た信用の出来る情報です。だが、考えても御覧なさい。×国は三十年も前から仮想敵国かそうてきこくとして我国を睨にらんでいるのです。あらゆる術策じゆつさくが我国に施ほどこされてある中に、最も陰険いんけんきわまるのはこの国際殺人団の本体であるところのJPC秘密結社です。×国は三十年前から各方面に亘わたって有望なる学才を有し、しかも貧乏だとか、孤児こじだとか云う恵まれていない人物を探し出して、これに莫大な資金を送り、その人物が立身出世をするように極力宣伝し、遂に今日我国の要路要路の実権を彼等の手に握るようにならば後援したのです。×国の参謀本部の命令一下、彼等×探は、いやが応でもその命令を執行しなければならぬのです。若もしそれに肯がえんじなかつたら、その男を国事犯で絞首台に送りでも、又、殺人隊をやつて絶対秘密裡に暗殺してしまいで、どうしても自由になるのです。彼等が始めて苦しいジレンマを意識したときには、その行く道は自殺があるばかりです。某博士の自殺、

某公使の自殺、某中佐の自殺、それ等、原因のはつきりしない自殺は、皆ここに源があるのです。これだけ申せば、国際殺人団の活躍が如何に必然的なものであり、決死的なものであるか御判りになったでしょう」

「いや、よく判りました。それ以上は、おたずねいたしませんまい。またこの御依頼にNOと答えたくても、即座に私の命のなくなることを思えば、YESと申して置くのがなによりであることも判っています。だが、私に大役をお委せになつても、若し私自身が、その結社の一員だったら、閣下は一体どうなさる御考えですか」

「どうも貴方は中々いたいと、ところを御つきになりますね。しかし御安心下さい。その御念には及びません。いくらでも善処すべきみちが作つてありますから」

この場面があつて、棕島技師は、国際殺人団の探索に当るために、剣山陸軍大臣直属のスパイを任命された。彼はそのために、如何なる場合もこの目的のために一命を抛うつて努力すること、このスパイたることは、絶対に他人に洩らしてはならぬのみか、同志であるものを発見したときと雖も、その事情を明かし合つてはならぬこと、但しスパイをとめるについて、事情をあかすことがないのであれば、助手を使つてもさしつかえないことなどと、厳しい注意をこまごまとうけたのであつた。

「誓つて、祖国のために！」棕島技師は、燃えるような眼^{がんぼう}眸^{ぼう}を大臣の方に向けて立ちあがると、こう叫んで、右手をつとのぼした。

「天^{てん}祐^{ゆう}を祈りますよ、棕島さん」大臣の幅の広いガツシリした掌^てがギュツと、棕島技師の手を握りかえした。

3

棕^{むくじま}島^{しま}技師は大臣のさし廻してくれ^{ほろ}た幌^か深い自動車の中に身を抛^なげこむと、始めて晴々しい笑顔をつくつた。右手でポケットの内側をソツとおさえたのは、いましがた大臣から手渡された莫大な紙幣束^{さつたば}を気にしたためであろう。

さてそれからはじまつた棕島技師の行動こそは、奇怪^{きかい}至極^{しじく}のものであつた。

彼は、大臣からさしまわされた自動車を、銀座街^{ぎんざがい}にむけさせた。尾張町^{おわりちやう}の角を左に曲つて、ややしばらく大^{だい}道^{どう}を走ると、とある横町を右に入つて、それからまた狭い小路

を左の方へ折れ、やがて一軒のカフェの前に車を止めさせた。そこは、悪性な銀座裏のカフェの中でも、とかく噂の高いエロ・サービスで知られたバア・ローレライであった。椋島技師は、午前十時のバアの扉を無雑作に開くと、ツカツカと奥へ通り、そこに二階に向つてかけられた狭い急勾配の梯子段の下に靴をぬぎとばすと、スルスルと昇つて行つた。二階は真暗であつた。ムンと若い女の体臭が鼻をつく。

「キミちゃん居るかい」彼は暗中に声をかけた。

「ああ、ムーさんだわね、向うから二番目に、キミちゃん、まだ寝ているわ」と女給頭のお富が彼の膝頭の辺から頓狂な声をあげた。

「そうか。僕は二時頃まで、ちよいと寝たいんだ、あとからウンと奢つてやるから大目に見るんだぜ。それからお富姐御すまないけれど、その時間になったら、コツクの留公に用が出来るんだから、どこにも行かずに待たせて置いてくれ。もう二時まで、なんにも口をきかないからな、話しかけても駄目だぜ」

云いたいことを云つてしまうと、彼はオーバーを脱いだり、バンドをゆるめたりして、イキナリ、おキミの寢床にもぐり込んだ。ぼそぼそと、しばらくは小声で話し合っているらしかったが、やがておキミは寢床から出て行つて、あとには椋島一人が、何か考え悩ん

でいるものか、てんでんはんそく転輾反側している様子だった。こうして時計は、いく度か同じ空間を廻つてやがて午後二時を報ずるブーン、ブーンという眠そうな音が階下したからきこえて来た。それがキツカケでもあるかのように、おキミがおこしに上つて来た。

棕島とおキミとコツクの留吉との三人が外出の仕度をして店の方に出て来たのは、それから一時間ほど経つてのちのことである。

「まあ、かそつぷようかい仮装舞踊会へでもいらつしやるの」

「ムーさん、勇敢な恰好ねえ」

などと、ウエイトレス連がはや囁いた。たしかにそれは不思議な組合わせであった。留吉はシャンとした背広に、黒いちやう喋ネクタイをしめて紳士になりすましていたし、おキミはどこで借りて来たのか、三越の食堂ガールがつけているようなすそ裾のみじかいセルの洋服をきて年齢が三つ四つも若くなっていたし、棕島は棕島で、留吉の衣裳を借りたらしく、コールテンのズボンに、スエーターを頭から被ったという失業者姿であった。

三人は、まぶしいペイブメントのうえへ飛び出した。三人が列をそろえて一列横隊で歩き出したところへ、よこちよう横丁から不意にとび出して来た若い婦人がドンと留吉にぶつかりそうになった。

「ごめん、あそばせ」と婦人は豊かな白い頬をサツと桃色に染めながら言つて、チラリと一行を見たが、

「呀あッ」と小さい叫声をたてた。この婦人は鬼村博士の一人娘の真弓まゆみこ子にちがひなかつた。無論彼女は、いち早く、椋島の姿をみとめたのである。だがその異様いようないでたちの彼を何と思つて眺めたであろうか、スカートの短いところでカムフラージュされるとしても、生あ憎にく彼にしなだれかかつていたコケットのおキミを見落みおとす筈はずはなかつた。これに対して、椋島は遂ついに一言も声を出さなかつたし、むしろ顔をそむけたほどであつた。しかし、何どうやら氣になるものと見えて、真弓子の行く後を振りかへつた。彼は真弓子がこちらを振りむいたのを見て慌あわてて頭を立てなおした。

4

其の夜の六時、電気協会ビルディングの三階第十号室には我国の科学方面に於けるさま

さまざまな学会の会長連が、円卓を囲んでずらりと並んでいた。その人数は十七名もあろうか。電気学会会長である帝大工学部長の川山博士の白頭や、珍らしく背広を着用に及んでいる白哲長身の海軍技術本部長の蓑浦中將や、テレヴィジョンで有名なW大学の工学部主任教授の土佐博士の丸い童顔や、それからそれへと、我国科学界の最高権威を残りなく数えることができるのであった。勿論、その座長席には鬼村博士のやや薄くなつた大きな頭がみえていた。

会合は、科学協会としての例月の打合わせ会であつたのであるが、議事が一とおり済んでしまふと、鬼村博士が、やおら、ずんぐりと太い身体をおこして立つた。

「みなさん、例月議事は、これで終了いたしました。次に是非みなさんの御智恵を拝借したいことがあります。御承知でもありましたが、近來どうしたものか、われわれ科学者仲間におきまして、不測の災害に斃れるものが少くない、いや、寧ろ甚だ多いと申す方がよろしいようであります。これにつきまして、この頃では、さまざまの臆説が唱えられて居るようでありまして、中には、これは科学者に共通な悪運が廻つて来たものだとして、或る者は殺人魔の跳梁であると申し、また或る者は偶然災害が続くものであつて決して原因のあるものではないと反駁をいたしておるようなわけであります。私個人の

考えといたしましては、どうも気が変になった犯人のなせるわざであると考えて居るのであります。それが如何なる人物であるか、探偵でもありませんのでつきとめては居りませぬが、どうも一と筋縄ひすじなわや二筋縄ふたで行かぬ人物であり、しかもその犯人は相当インテリゲンチヤであると思うのであります。それで吾人は充分、警戒をする必要があると考えます。殊に今日迄の災害の後をふりかえつてみますに、いずれも会合の席を覘ねらつて居るようでありまして、今後、私共科学者の集会はなるべく控えるか、または極力秘密な場所に開なき、尚なこれに官憲の保護を得るようにつとめたいと考えますが、かように私の御警告申上げることについてみなさんは、或いは異説をおもちかと存じ、今度は充分御対論を願ないたく尚警戒法なについて御心付の点をお話し願ないたい。現に今夜のこの会合の如き、最も麁わづ殺つし甲斐がいのあるものでございますが、いままでなんともないところをみると、或いは遂すになんでもないかもしれないのであります。或いは又、これから爆弾が降つてくるかもしれないのでございます。いやそれは冗談でありまして、実は私の老婆心から、本会場は既に嚴重な警視庁の警戒でとりまいてございますから、どうぞ御安心をねがいます」と博士はニヤニヤと両頬えに笑みをうかべながら諧かいぎやく諠ろを弄ろうして着座したので、最初のうちは顔色をかえた会員も、哄こうしやう笑えに恐怖をふきとばし、一座は和なごかな空気にかえつた。一

旦席についた博士は衣囊かくしから金時計を出してみたあとで一座の顔をみわたしたが、「どうぞ御意見を……」と言った。そして急に立ちあがって「ちよつと便所へ……」と隣席の川山博士に耳うちをすると、席を立った。そして入口の扉ドアをあけて室外に出ると、

「先生、なにも変ったことは御座いません」と、今夜の警戒の第一線に自ら進んで立っていた松ヶ谷学士が、いきなり博士に顔を合わせて、こう囁ささやいた。

「わしは便所へ行つて来る、よろしく頼むぞ」博士は、例の調子で呻うめくように言うのと、そろりそろりと便所のある方へと足どりを搬はこんで行つた。会合室内では蓑浦中將が立つて、

「唯今、協会長の御説明のあつた最近の奇怪なる事件につきまして、私の……」と、そこまで話をすすめて来たときに、どうしたものか、グローブの中の電燈が、急に二倍もの明さに輝いたかとみる間に、スーウという微かすかな音をたてて消えてしまった。それだけのことであつた。別に爆発物の破裂しそうな煙えん硝しょうの匂いもしなかつたし、イペリット瓦斯ガスの悪臭も感じられなかつた。座中の或る者が、

「唯ただいま今、私が給仕を呼びますから」と言つたので一同は子供のよう立騒ぎはしなかつたが、いずれも内心の不安をかくすことが出来なかつた。声をかけた人は、そろりそろりと扉ドアの方に近づいて行つた。やがて扉に手が触れたので、両手を上下左右に伸ばしながら

把手ハンドルの在ざい所しよを探しもとめた。把手はあつた。彼氏はその把手を握つてギユツと廻すと、外へ押したが、どうしたわけか扉は開かない。そんなわけはないと思つて更に一生懸命押してみたが、今度はなんだか腕が痺しびれてくるようで力が入らなかつた。そのうちに頭が割れるように痛み出し、胸がひきしぼられるように苦しくなつてきた。

「やややられたツ。扉が、あああかない」と叫びながら、扉を滅多うちに叩きつけた。暗黒の室内のあちらこちらでは、獣けもののような絶望的な叫び声^が起り、うんうんと呻しん吟ぎんする声^がだんだん高くなつて行つた。室外では、今、松ヶ谷学士が扉に身体をうちつけている。刑事や警官が扉の前に走はせ集つて来た。扉はドーンと開く。松ヶ谷学士は先頭になつて飛び込んだ。

「灯あかりを、灯あかりを」

と叫ぶ警官がある。今入つたばかりの松ヶ谷学士がよろよろと入口へよろめき出て来ると、パタリと其そのままたお儘たお斃たおれた。惨劇さんげきの室の前に集つた人の中から、マスクをかけた長身の男が飛び出して、

「毒瓦斯だ！ 入つてはいけない」と叫んだ。彼は腰をかがめると、入口に斃たおれている松ヶ谷学士を肩に担かつぐと、ドンドン階段の方へ駆け出して行つた。そのとき、便所から帰つ

て来た鬼村博士が、この騒ぎに驚いて、博士に似合わぬ狼^{ろう}狽^{ばい}ぶりを見せて、室内に飛込もうとしたが、それは警官が二人がかりで抱きついて、やっと止めることができたのであった。

鬼村博士を除く十六名の学会長は、悉^{ことごと}く枕^{まくら}を並べて無惨なる最後をとげてしまった。鬼村博士が、偶然にも唯一人助かったことは、不幸中の幸^{さいわい}であると、各新聞紙は悲壮^{からげ}な空^{からげ}元^{かん}氣^きの社説^{しゃせつ}を掲^{かか}げた。だが、当夜の不思議な毒瓦斯電球を、誰が装置したのであるか、また入口の扉は誰が鍵をかけたのであるかについては、各紙は一行の報道もしていなかった。現場から行方不明となった松ヶ谷学士には、すくなくからぬ嫌疑^{けんぎ}がかけられていたが、その生死のほどについては知る人が無かったのである。

5

惨劇^{さんげき}は、満都の恐怖をひきおこすと共に、当局に対する囂^{ごうごう}々々たる非難が捲き起った。

「科学者を保護せよ、犯人を即刻逮捕せよ」と天下の与論よろんは嵐の如くにはげしかった。

惨劇のあつた翌日、秘密裡ひみつりに、日本化学会の幹部二十三名が、学士会館の一室で会合した。会場は言うに及ばず、会館内の隅々まで、電球や電熱器をはじめ、館内に在るありとあらゆるものが厳重な検査をせられたのち、内外に私服警官隊の網をつくり、それこそ一匹の蟻のぬけ出る道もない迄に、警戒せられたのであつた。その会合は、午後七時となつて、やつと開催せられた。勿論もちろんこの会合には、昨夜の惨劇から幸運にものがれた鬼村博士が座長席にすわつて、「毒瓦斯ガス犯人についての意見」を交換し合い、これに対抗する具体的手段を考案せられんことを希望した。一座は、それこそ、我国に於ける化学界の至宝しほうと認められる学者たちばかりであつた。この会合で、充分効果のある具体的方法を考え出さない限り、当分はいかなるこの種の会合も危険で出来ないのであつた。一座はそれについて重大なる責任を思いながらも、昨日の惨劇におびえ切つて兎角とかく、議案にまとまりがつかない様子であつた。一座の中には、鬼村博士の命拾いまでを神経に病んで若しこの席から博士が立つようであれば、直ぐ様すさまその後を追つて室外に出なければ危険であると考え、博士の行動にばかり気をとられている人もあつた。

「椋島君は、見えないようですね」と訊きいた人がある。

「棕島君は、来ると言っていました。どうしたものかまだ見えません。いや、いずれその内やって来ますよ」

と鬼村博士が答えた。

「棕島君は、鬼村さんの御令嬢が昨日家出されたので、それで忙しいらしいですよ」と隣りの化学者が囁いた。

「だが、今日の問題は、国家の興^{こうはい}廢^{はい}に関する重大事項じゃありませんか」

「それに違いありませんが、この道ばかりは何とやら云いますからね」

その噂にのぼった棕島技師は、鬼村博士の言葉のとおり、実は既にこの学士会館に到着しているのであった。だが彼は、どうしたものか、コック部屋にいたのであった。前の日留^{とめきち}吉に借りた妙ないでたちの上に、白いエプロンをぶら下げ、白いキッチン・キャップを被^{かぶ}っていた。どうやら留吉の紹介でこのコック部屋へ這^{はい}入りこんだものらしい。それはどこからみても、コックでしかなかった。棕島は料理の方には眼も呉^くれず、部屋の片隅にある妙な道具の蔭に頭をつき込んでいる。その道具のことを説明すれば彼氏の奇怪な行動がわかるのであるが、それはプリズムとレンズとからなる反射鏡で、その器体はコック部屋から、換^{かんきどう}気洞を上の方に匍^はいあがり、果^{かぜん}然、日本化学会の会合のある室に届いてい

るのである。また彼の側にある特設電話器の延びて行く先を辿^{たど}つてゆくならば、例の会合のある三階の窓際にある衝^{ついたて}立の蔭に達しているのを発見するであろう。そればかりではない、その衝立のうちには、洋装の給仕女が控えていて、時々ぬからぬ顔をしてはその衝立から顔を出し、会合のある部屋の扉に注目しているのを発見するであろう。いや、それがバア・ローレイのおキミであることも既に発見せられているであろう。

さて棕島技師ののぞいている望遠鏡には一体何が映っているのであるか。そこには、例の会合室の正面に座っている鬼村博士の全身がクツキリと映し出されているではないか。棕島技師は、博士の拳^{きょん}動を静かに注目している。博士は今、何か喋^{しゃべ}っているらしく口を開閉している。やがて一礼をして席についた。博士の右手が、スルリと伸びて、衣囊^{ポケット}の時計にかかった。博士は、秒針の動きを、じつと眺めている様子である。棕島技師は、ゴクリと唾^{つば}をのみこんだ。博士は時計を握ったまま、顔を正面に立てなおした。そのとき博士のとなり^まに居るK大学の昌木教授^{まき}が何事か博士に向つて尋ねているようである。博士は、じいと正面を向いた儘^{まま}答えない。昌木教授は、すこし苛^{いら}々した面^{おも}持^{もち}になつて来て、卓を叩いてワンワン詰め寄るかのように見えた。他から人が立って来て昌木教授をなだめている様子だ。しかし博士は黙^{もく}して語らない。

ところが其の時である。果然、昌木教授の表情が變つて来た。昌木教授をなだめている人も、嫌な顔付にかわつた。

「シ、しまった！」叫んだのは椋島技師である。反射鏡から飛びのくと、傍の電話器をつかんで、自棄に信号をした。

「キミちゃん。早く信号しろ！」

そう言ったかと思うと、椋島技師は、氣が變になつたようになってコック部屋を飛び出した。

おキミは、素早く側の窓を開くと、窓の下に腰をかがめ、右手を水車のように廻すと、何か黒いものをパツと窓外になげた。なにか街路の上で爆発するらしい音がして、スーウと青い光が閃いた。パンパンと音がして、ヒューツと銃丸が窓外から、おキミの頭をかすめて衝立にピチピチと当つた。そのとき遅し、例の会合のある室の大きな硝子の窓が、バシーン、ガラガラというすさまじい音響をたてて壊れ始めた。何だか真黒な大きいものが、あとからあとへと硝子窓に飛んできては、硝子という硝子を悉く壊してしまつた。例の室内は硝子の破片がバラバラと雨のように降つた。硝子の雨を浴びた一座のものは奇声をあげているばかりで、逃げ出そうとする氣配はなかつた。どうやら、その前に、

一同は毒瓦斯ガスに幾分あてられているかのように、その場にグツタリと身体をのぼしていた。硝子の破片で傷ついているものもあるようであったが、別に痛そうな顔をしていないのは、中毒作用のせいであろうと思われる。唯一人の例外は、鬼村博士であった。博士だけは、直立して、柱の蔭に硝子の雨を避けていた。警官連中は入口の扉を開きはしたが近寄れないので、どうしたものかと犇ひしめき合あつていた。

そのところへ、いきなり飛び上つて来た怪漢がある。警官が取押とりおさえようとする手をはらいのけて、勇敢にも室内へ躍り込んだが柱のかけにひそんでいる鬼村博士の姿を目懸めがけて飛びかかつて行つた。博士は悲鳴をあげて救いを求めた。怪漢は、博士の顔を床の上におしつけると、博士の大きな鼻をねじり廻して、何だか綿のような白いものを、指先で抜きとつたようであった。それはどうやら特種とくしゆの薬品を浸みこませた濾気器ろききで、博士が唯一人毒瓦斯に耐こらえていたのも、そのせいであるかのように思われた。そこへ警官連中が上から折重つて怪漢をひきはなし、高手たかてこ小手こてに縛りあげてしまった。

博士は身震いして、ヨロヨロと立ち上つたが、そこに引きすえられた怪漢の顔を見ると、「棕島君、お気の毒じゃな」と、薄気味のわるい笑顔をズツと近付けた。

翌朝の新聞紙は、一斉に特初号活字、全段ぬきという途方もない大きな見出しで、「希

代の科学者麿殺犯人遂に捕縛せられる。犯人は我国毒瓦斯学の権威椋島才一郎などと、昨夜の大事件を書きたて、彼の現場に於ける奇怪な行動や、精密な機械類の写真などが載った。帝都は鼎の湧くがように騒ぎ立ち、椋島が収容せられたという市ヶ谷刑務所へは、「椋島を国民に引渡せ」というリンチ隊が、あとからあとへと、入りかわり立ちかわり押しかけては、時代逆行の珍現象を呈した。それを鎮撫するのに、陸軍大臣に麻布第三連隊に総動員を命ずるという前代未聞の大騒ぎが起つたのであった。

しかし、新聞紙面には、曩に行方不明になつた松ヶ谷学士や、家出をした鬼村真弓子のことについては、一行も報道していなかつたばかりではなく、昨夜、活躍したおキミの消息も、それから又おキミの信号により、硝子窓の破壊に従事した人物についても、何の報道もしていなかつた。

それから約一ヶ月の月日が流れた。

あの事件を最後の幕として、科学者虐殺事件は其後そのごまったく起らなくなった。椋島技師の犯行は、愈々いよいよ明白となつて死刑の判決が下り、その刑日けいびもいよいよ数日のちに近付いた。世間は、反動的に静かになり、東京市民は、めつきり暖くなつた来る朝くる来る朝を、長々しい欠伸あくびまじりらで礼讃らいさんしあつた。

鬼村博士は、どの市民よりも、ずっとずっと早くから、あの凄惨せいさんきわまる事件を忘れてしまつたかのような面持で、何十年一日の如き足どりで化学研究所に通い、実験室に、立籠たてこもつていた。研究所の入口で、出勤しゅっしん札ふだを返す手つきも同じなら、帽子を被つたまま、何時間となく室内をグルグル歩きまわる癖くせも、全く前と同じことであつた。

しかし、仔細しじさいに誠を知り給う神の眼には、博士一味の行動こそは、その後、いよいよ出でて、いよいよ怪けしからぬものがあることがよく映つていたことであろう。実に博士こそは、劍つるぎ山やま陸軍大臣が、かつて椋島技師にスパイを命じたときに語つてきかせた国際殺人団の団長であつたのだ。その下に集る団員は、博士の命令で、あの事件以来ピタリと鳴りを鎮めしずめ、その代り、新あらたに恐ろしき第二期計画に着々として準備を急いでいた。博士は、多数の権威を喪うしなつた我国の科学界の王座に直つて、あらゆる機関を手足の如くに利用してい

た。殊に博士が所長を勤める研究所にあつては、所外不出ではあるが極秘裡に、数々の恐ろしい実験がくりかえされていた。たとえば、その一つの部屋を窺つてみるならば、大きな金網の中に百匹ずつ位のモルモットを入れ、これを実験室の中に置き、技師たちは皆外へ出た上で、室外から弁を開いて室内へ、さまざまの毒瓦斯を送り、モルモットの苦悩の有様や、死に行くスピードなどを、部厚な硝子窓からのぞきこんでは観測するのであつた。こうして色々な毒瓦斯が研究されはしたが、結局、前に椋島技師が発明して残して行つたフォルデリヒト瓦斯に及ぶ強力な毒瓦斯はなかつた。これは非常に濃厚なもので、適当な精製法を経ると、三間四方の室なら五のフォルデリヒト瓦斯で、充分殺人の目的を達するようであつた。博士は最近、この毒瓦斯の精製法に成功したのであつた。

博士は其の日の午後、近くにせまる陰謀の計画をチエックしていた。すると、博士の愛するロボットは、珍客の案内を報じたのであつた。博士はその密室を出て、広間の扉を開いた。そこには、この一ヶ月というものの間、全く生死不明を伝えられていた松ヶ谷学士が、おどおどした眼付で立っていた。

「松ヶ谷君か。君、どうしていたんだ」と博士は機嫌がよかつた。

「ハイ、それは追々御話し申上げる心算でございます」

と松ヶ谷学士は言つて、口をつぐんだ儘、やや躊躇している風だったが、強いて元気をふるいおこす様子で、

「先生、実は、……申上げ憎いので御座いますが、わたくし、お嬢様のお使いに本日参上いたしましたのですが……」

「ほう、真弓の使いというのか」博士は冷く言い放つた。「遠慮なくここへ連れてくればよいではないか」

「それが、どうしても先生に、所外まで御出で願いたいということなんで、実は、いろいろ入組んだ事情もございまして、所内へ入るのは嫌だと仰有いますのですが……」

「よし、行つてやろう」と博士は、何を考えたか機嫌よく立ちあがつた。

真弓子は、研究所から鳥渡はなれた森の中に待っていた。彼女は、松ヶ谷学士が運転して来た自動車の中に、身うごきもせず待っていた。彼女の相貌は、この一ヶ月の間に、森華明の描いた小野小町美人九相の図を大急ぎで移つて行つたように変りはてていた。額は高く、眼窩は大きく、眼にはもう光がなかった。蒼白の頬、灰色の唇、すべて生きてゐる人間のものではなかつたのである。彼女は、椋島に捨てられたものと思ひ懊惱の果、家出をしたのであつたが、電気協会ビル事件のとき、思いがけなく椋島のために一

命を救われ、その翌日は其の助手となつて学士会館の硝子窓破壊係をつとめてその夜の犠牲を少くすることに成功した松ヶ谷学士に探し出されて、棕島の誠意を伝えられたが、それは遂に好意であつて得恋ではなかつた。其内に識るともなく父鬼村博士の陰謀に氣付き、夜に昼を継いで歎きかなしんだため、到頭ひどく身体を壊してしまつた。だが、棕島技師の死刑が近いと聞いたので、彼女は片恋ながら、なにをおいても棕島を救いたく思い、それには、父博士によつて、棕島技師の行状を有利に証言して貰うことができれば、必ず彼女の思いはとどくものと信じ、こうして生と死の境を彷徨する身体をここまで搬んできたのであつた。

彼女の傍に立つた鬼村博士は、急ににがりきつた顔付になつて、真弓子の痛々しい姿に、一言の憐憫の言葉もかけはしなかつた。彼女は、いくたびかはげしく咳きいりながら、虫のような声でくりかえしくりかえし歎願し、棕島の助命を頼んだのであつた。しかし父博士は一言も口を開かなかつた。が真弓子が絶望のあまり、泣き声も絶えてその場に氣を失つたとき博士は始めて口をきいた。

「松ヶ谷君、悪魔のしのび笑いを耳にしないかね！」

二発の銃丸が、消音短銃のことで、音もなく博士の手から松ヶ谷学士と真弓子の脇

腹に飛んだ——

「とんだことに、永く手間どらせた哩わい」と博士は咄つぶやきながら後を再びふりむこうともせず、そろそろと研究所の方へ引きかえして行つた。それは博士の退所時間三十分も過ぎていた。博士は、門をくぐり、パイブメントをとり、いくつかの会社のビルディングの蔭に行き、研究所の扉を押してスーウと内に入つた。名札なふだをかえすと、スタスタと実験室の中に入つて行つた。そのとき、別な廊下から、白い実験衣をきた一人の技師があらわれた。彼は、その壁にかかつていた研究所員の名札を見まわした。

「所長室はあいているようだから」と、今し方、鬼村博士が習慣的にかえして行つたために、「不在」をあらわす赤字の札になつて指さしながらから顔を出した助手に云つた。「今試作した毒瓦斯は、直ぐ所長室へ送りこむんだ。そして一時間置きに、プレッシュユア・ゲージプレッシュユア・ゲージの氣圧計けいあひを読むんだぜ」

「じゃ、今送ります。時間がよろしいようですから。——バルブ弁をみんな開いて七百八十五ミリになりました」

「オウ・ケー」

* * *

完全で、正確この上なしの頭脳を持つている筈の鬼村博士はまことにつまらない、錯覚のために不慮の最後を遂げた。国際殺人団全体にその飛報が伝わると団員一同は色を失った。それも無理のない話で、博士の企てた第二期計画の日は、実にその翌日の暁かけて決行されるのであったから。

それは何？

翌日の早暁、帝都の西郊から毒瓦斯フォルデリヒトを撒きちらし、西風にこれを吹き送らせて全市民を殺戮しつくそうという、前代未聞の計画であった。彼等は十三台の飛行機にそれぞれ分乗して、午前三時というに、根拠地を離れて午前四時を十五分過ぎる頃あい、予定どおりに今や眠りから醒めようとしている帝都の上空を襲来した。十三台の殺人団機は翼をそろえて南にとび、機体の後部から猛毒フォルデリヒト瓦斯を濺々と吐き出した。その十三條の尾がむくむくと太くなり、段々と地上に近づいて来るとき、北方の空から、突如として二隊の快速力を持った戦闘機があらわれ、一隊は殺人団機の後をグングン追いついて行った。他の一隊は、今や帝都の上に垂れ下ろうとする毒瓦斯の煙幕よりは、更に風上に、薄紅い虹のような瓦斯を物凄くまきちらして行った。それは椋島技師が陸軍大臣と打合わせた手筈により、投獄と世間を偽って実は密かに某

所で作りあげたフォルデリヒト解毒瓦斯であった。勿論、その一隊の誘導機上には、もう死刑執行の日も近い筈の棕島技師のいとも晴やかな笑顔があった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1931（昭和6）年5月号

※表題は底本では、「国際殺人団の崩壊《ほうかい》」となっています。

入力：田浦亜矢子

校正：もりみつじゅんじ

2001年12月3日公開

2011年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

国際殺人団の崩壊

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>